

ソウルと東京：大都市の社会と空間

2009年11月2日（ソウル市立大学本館7階小会議室）

基調演説：都市の空間と社会

松本康(立教大学)

1970年代以降、先進工業国の諸都市は、空間と社会の再編過程に入りました。

それまでは、工業化に伴う都市化と郊外化が主要な趨勢で、この趨勢は、一世紀以上も続いてきました。第二次世界大戦の前と後で、資本主義は変化しましたが、それでも都市化・郊外化の趨勢は変わりませんでした。

戦後の都市化の背景にある要因は、米国の豊かな消費市場を頼りに、西側先進諸国が重化学工業化を進めたことにあります。

米国を基軸とする、この非対称的な国際経済の構造は、西側先進国、とくに旧西ドイツと日本が高品質の工業製品を米国に輸出できるようになったときに、危機を迎えました。

米国北東部や五大湖地方の工業都市は、脱工業化によって衰退し、これらの工業都市を背景とする大都市も衰退しました。

その代わりに、米国の製造業は海外生産に転じ、グローバルな生産体制に再編されました。また、フロストベルトから引き揚げられた資本の一部は、サンベルトのハイテク産業に投下されました。

こうして工業化とグローバル化が新しい趨勢を表すキーワードになりました。

米国の社会学者、マニュエル・カステルは、情報化を工業化に代わる資本主義の発展様式であると考え、工業化に行き詰った先進資本主義は、情報化による発展へと、資本蓄積の様式を転換しようとしていると論じました。

情報化は、シリコンバレーのようなハイテク生産のための「新しい産業空間」を生み出すとともに、グローバルな情報ネットワークの結節点となった都市では、情報インフラを整備した「フローの空間」が出現して、従来の場所の空間に割り込み、「都市空間」が再編されると分析しています。

また、サスキア・サッセンのように、グローバル化、とくに金融のグローバル化に注目する論者もいます。サッセンによれば、経済のグローバル化は、グローバルな指令機能をサービスとして生産する「グローバル都市」を生み出すと論じました。

実際、ニューヨーク市やロンドンは、ごく最近まで、国際金融とそれに関連する専門サービスの集積によって、繁栄してきました。

しかし、ここで重大な疑問が生じます。1980年代に姿を現したグローバル情報経済は、グローバルな持続的発展を約束するものであったのか、という疑問です。

新自由主義に支えられたグローバル経済は、ラテンアメリカ、東南アジア、東アジア、ロシアなどに、次々と経済危機を引き起こし、ついには昨年来、米国のサブプライムローン問題に端を発する金融危機を引き起こしてきました。

グローバル情報経済は、実は、たいへん不安定で、ときにはバブル経済を、そしてときには金融危機を引き起こしてきたのです。

過去30年の経験からわかってきたことは、都市はたんに、グローバル情報経済に統合されるだけでは、持続的に発展できない、ということです。

不安定なグローバル経済に適応するためには、それぞれの都市が固有に持つ潜在能力を見つけ出し、それを活用して、グローバル情報経済とのつながり方を工夫する必要があります。

たとえば、米国の経済地理学者であるリチャード・フロリダは、米国のブームタウンの研究から、才能 (talent)、技術 (technology)、寛容性 (tolerance) の3Tが、創造的な人々を都市にひきつけ、その都市を繁栄に導くと論じて、注目されました。

同様に、シカゴの再生過程を分析したT・クラークも、都市のアメニティが脱物質的な価値観をもつ新しい専門職層をひきつけ、都市再生の原動力になると論じています。

また、英国の都市計画家ランドリーは、欧州で脱工業化によって衰退した工業都市が、その歴史的遺産に価値を見出すことによって、都市の持続的発展を可能にするという創造都市論を展開しています。

都市の文化や個性の創造によって、都市再生を図ろうとする動きは、ソウルでも、上海でも、横浜でも、大阪でも見られます。

これらの試みが成功するかどうかは、わかりませんが、市民が創造性を発揮できる都市こそ、グローバル情報経済に翻弄されずに、これに適応できる都市であるように思います。

私たちの課題は、現実の都市や地域のなかから、創造性の芽生えを見つけ出していくことにあると思います。